島根県宍道町,大森神社旧神職宍道(池田)家蔵『勲業 宍道家正系』(一): 宍道町神社研究の資料として

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2000-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 服部, 旦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1403

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



島根県宍道町、大森神社旧神職宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

宍道町神社研究の資料として―

服 部

旦意

目 次

はじめに

宍道鈴子家所蔵の諸家系図

文書②巻子『出雲勲業宍道家正系』書誌解題

三 162文書22【勲業宍道家正系】書誌解題

162 「勲業宍道家正系」翻刻

四

はじめに

私はこれまでに島根県八東郡宍道町の諸神社、および諸神社に係わる研究として、左記のA~H論文を公刊し、その続いのでは、そのでは、これでは、またが、またが、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは 島根県宍道町、大森神社旧神職宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

編のⅠも本論文と同時に公刊する予定である。

宮家」)であった。宍道町大字佐々布の大森神社旧神職宍道(池田)家は、少なくとも江戸時代以来大正8(19)年に最後のコヤ 神職峰清(天保6〈1835〉年生)が没する頃まで、大字佐々布内の諸社を管掌して来た家である。 (屋号「前代

して、『出雲国風土記』(以下『風土記』)の宍道郷の記載についても若干寄与するところがあるのではないかと思う。 が明らかとなった。そこで、本論文では同家の家系図を手掛かりとして同家の歴史を考察することにする。この研究を通 記』宍道社)をめぐる社論(G~I論文)を考察する中で、宍道(池田)家の宍道地域における神社史上の足跡の大きいこと 宍道氏家系図」としてB論文(73ペ〜80ペ)に紹介し、解説を附したのみであった。A論文以来、就中式内宍道神社(『風土 しかしながら、これまで私は宍道(池田)家そのものを研究対象としたことはなく、同家の家系図の一部を「宍道達氏蔵

道家正系』は、宍道峰清の孫故宍道勲氏の夫人鈴子氏が所蔵される3種の家系図のうちの一つで、作成時期が最も古く、 つ原本と見做されるものである。 本稿では、同家に伝わる3種の家系図のうちの一つを翻刻紹介し、考察を加えることにする。ここに紹介する『勲業宍

以降を省略しておられる。井上氏の解説も戦国武将の宍道氏に止まっており、それ以外には触れておられない。 宍道氏の関連資料として紹介したためであろうか、井上氏は2世から28世の間と43世(私がここに紹介する系図は41世が最終) おられる。但し、 司氏が最近刊行の『宍道町史 史料編』(郊ペ〜53ペ。宍道町では、昭和38〈6〉年に『宍道町誌』を発行した。D論文ではこの略号を(1) が島根県古代文化センター所蔵の富家文書中にあり(同センター提供のマイクロフィルムからの焼付による確認)、それを井上寛 『町誌』〈14ペ下段8行目〉 とした。以下、この新町史の略号を『新町史』もしくは『新町史(史料編)』とする)に紹介し、解説を加えて この系図を祖本として後に4世以下を後補した系図がある。それが後述第一章の⑮系図である。⑯系図と同種類の系図 『新町史』は、古代中世史料を収録しており、佐々木京極氏より出て主に戦国時代に活躍した武将の

その系図について井上氏は次のような評価を下しておられる。即ち、

あって、やはり系図の信憑性という点で、少なくともここに掲載した中世部分に関しては重大な疑義を含むものと考 すでに中世に関しての歴史的事実が確認できなくなった状況の中でこの系図が作成されたのは疑いのないところで

えなければならない。(『新町史』55ペ下段)

る。そして、翻刻せられた同系図の末尾に「本記録の内容は正確な歴史的事実とは認め難いが、参考のため掲げる。」と附 とし、「本家系図は近世後期、ないし幕末期になって新しく創出されたと考えるべきものであろう。」(同53ペ上段) とせられ

いても該当すると私は考える。さらに本稿の続編での考察によって、この系図の祖本(囮)の作成された時期は井上氏の推 井上氏のこの学問的評価は、私がここに紹介する系図の井上氏の省略せられた範囲(主に中世以外)に相当する部分につ

定よりもさらに限定され、作成者もある程度推測がつくのではないかと予測される。

の伝承と記憶をその基礎に持ち、その限りにおいて私たちに、宍道氏の歴史に関する一定の情報を提供しているのである。」 そのような性格の系図であるにも拘わらずここに紹介し、考察の対象とする理由は、井上氏が「これらの系図は何らか(2)

が、このことは宍道(池田)家についても当てはまると思う。 (同왝ペ上段)とせられるのと同意見だからである。右の引用文中の「宍道氏」とは戦国武将の宍道氏を指しているのである

宍道町の神社史に関しても資するところがあるのではないかと考えられる。 ないけれども、少なくとも宍道(池田)家については、ある程度可能ではないかと思う。そして、宍道(池田)家をめぐる 本稿の『勲業宍道家正系』が戦国武将の宍道氏の歴史に関する情報を果して提供するか否かは、目下のところ断定でき

録することは後人の労を省くことになるし、考察を通じてこの系図の作成時期や作成者の性格、作成の目的もある程度は 考察(本稿続編)で示す如く、系図中の人物の実在を裏付ける作業はほとんど徒労に近いものを感ずるが、私の考察を記

島根県宍道町、大森神社旧神戦宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

八五

があり、また、地元の古文書を新たに発掘することもできなかった。門外漢故に不足点や誤りのあることを畏れるが、大 知られて来るのではないかと思う。但し、ほとんどが地方の人物であるらしいため、使用する総記類その他の資料に限界

方のご教示を賜り、充実させて行きたい。

からの続き番号の②である。 書の解説はDEG論文に記した。本論文で初めて引用する史料の番号は、I論文からの続き番号の⑫、文書番号はG論文 ものは、D~I論文での史料番号(ゴシック体の算用数字)を用い、文書番号(丸の中に算用数字)も同様とする。それらの文 道氏との混乱を避けるため、「宍道(池田)」と表記する。本論文において使用する史料のうち、D~I論文に紹介し用いた 本研究では、神職の宍道家は明治維新の際に池田姓を改めた(宍道〈池田〉家の文書による)ものであるから、(3) 戦国武将の宍

氏、諸系図の書誌について宮内庁書陵部櫛笥節男氏のご教示を賜った。本研究のための資料提供等については左記の方々 のご協力・ご教示を賜った。共に記して謝意を表する。 担当)に負うところが多く、学恩に謝する。また、歴史学上の事項について嵐義人氏、主に修験道の事項について首藤善樹 戦国武将の宍道家の史料および知見は、井上寛司氏編著『宍道町歴史史料集(中世編』・『新町史(史料編)』(中世は井上氏

家原吉造 大正15(26)年生。宍道町大字佐々布在住。

内田文恵 島根県立図書館郷土資料室

卜部吉博 島根県古代文化センター

遠藤春夫 大正12(23)年生。宍道町大字 東 来待在住。日吉神社(大字東来待) 宮司

大正12(2)年生。宍道町大森神社旧神職宍道峰清の孫慶子氏長女。宍道鈴子氏の姪。安希子の別名も昭和40 (6) 年代中頃以降持つ。小平市在住

宍道鈴子 明治43(10)年生。宍道峰凊の孫故宍道勲氏(明治35 <02> 年 6 月20日生 - 昭和58 <83> 年10月 4 日没)夫人。茨木市

注主。

野村泰久 昭和10 (35) 年生。宍道町大字白石豊龍寺住職

秦 武男 昭和7(33)年生。宍道町氷川神社禰宜。

槙原連吉 昭和4(2)年生。宍道町大字佐々布在住。

和田秀作

山口県文書館

本論文に使用する拙稿

て-|『風土記研究』第14号、風土記研究会、平成4 (92) 年6月、豊田。 「『出雲国風土記』意宇郡宍道郷家・宍道駅家・宍道社の比定-山陰道の 〝復元〟・宍道湖水位・考古学的遺跡を手がかりとし

В 像石・犬像石の同定を手がかりとして-附説『出雲国風土記』の尺度」『古代文化研究』第2号、島根県古代文化センター、 「『出雲国風土記』の数量表現の信憑性、ならびに数量表現をめぐる編纂過程の一考察-意宇郡宍道郷所造天下大神命の猪

平成6 (9) 年3月、松江。本論文73ペ~78ペに「**宍道達氏所蔵宍道氏家系図** (一部分)」を、解説を附して収録した。

B論文誤植等訂正(G論文掲載分の追加)

73ペ上段14行目 昭和58</br>

8
年頃→昭和58
年

(正)

С つつ-」『大妻女子大学紀要-文系』第29号、平成9(9)年3月、東京。本文書の略号を『**大森神社棟簡雑記**』とする。 「資料紹介『出雲国意宇郡宍道郷佐雑村 大森神社 村社雑社旧摂末社 棟簡雑記』 -八束郡宍道町「女夫岩遺跡」にふれ

D 「島根県八束郡宍道町、大坪三家の系譜と人物略歴(一) ―宍道町神社研究のための基礎的資料として-附説(1)『出雲国

八七

島根県宍道町、大森神社旧神戦宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

風土記』の方位のずれ-編纂過程推測の-手がかり-附説(2)宍道町市街地内の古代山陰道」『山陰史談』第28号、 山陰歴

史研究会、平成9(9)年12月、平田。

D論文誤植訂正(G論文掲載分の追加

1ペ下段2行目 あるいは南→あるいは

Ε 「島根県八束郡宍道町、大坪三家の系譜と人物略歴(二) ―宍道町神社研究のための基礎的資料として―」『大妻女子大学紀

要-文系』第30号、平成10(%)年3月、東京。

F 「島根県八東郡宍道町、大坪三家の系譜と人物略歴(三)〔完〕-宍道町神社研究のための基礎的資料として-」『古代文化研 究』第6号、島根県古代文化センター、平成10 (%) 年3月、東京。

G 「出雲国式内宍道神社(『風土記』宍道社)をめぐる社論(一) -三崎神社・大森神社を中心として-」 『大妻女子大学紀要-

文系』第31号、平成11 (99) 年3月、東京。 「出雲国式内宍道神社(『風土記』宍道社)をめぐる社論(二) - 三崎神社・大森神社を中心として-」『大妻国文』第30号、

大妻女子大学国文学会、平成11(9)年3月、東京。 「出雲国式内宍道神社(『風土記』宍道社)をめぐる社論(三)〔完〕 – 三崎神社・大森神社を中心として – 」『大妻女子大学

紀要-文系』第32号、平成12(0)年3月、東京。

注

(1) 宍道町史編纂委員会『宍道町史 史料編』、宍道町発行、平成11 (2)「これらの系図」とは、井上寛司氏が『新町史』において「参考」として翻刻し解説を加えた「宍道氏系図」(一)~(四)を指し **'**99 年、宍道町。略号『新町史』・『新町史

解説から判断すれば、この(五)も(一)~(四)の「これらの系図」と類似の性格と見ておられるものと推定される。 ている。これらは宍道(池田)氏の系図ではなく、戦国武将の宍道氏の系図である。(一)~(四)は当初『宍道町歴史史料集 『新町史』では(四)の後に「〈参考〉宍道氏系図(五) 勲業宍道家正系」として新たに追加して翻刻と解説を行なっておられる。 (中世編)』(平成4〈92〉年)に発表され、後に『新町史』に解説と共に転載されたものである。解説の文章も変わっていない。

3 『宍道達氏所蔵宍道氏家系図』(B論文77ペ下段4~7行目) には、50世宍道神主幸雄 (池田重章と同一人物) について「明治ノ度幸 雄ト改ム」と記す。同系図の45世より49世(同『系図』は45世以降51世峰清までが記されている)の間は池田姓である。 E論文28ペ上

(4)井上寛司編著『宍道町歴史史料集(中世編)』、宍道町教育委員会発行、平成4〈タシ〉年、宍道町 段史料50にも「造酒重章(後宍道幸雄ト云フ)」とある。

| 宍道鈴子家所蔵の諸家系図

160『勲業宍道家正系』(文書22) のほかに、 宍道 (池田) 家は次の3種の家系図を所蔵しておられる。

- ④ 卷子『出雲勲業宍道家正系』1軸。(文書②)
- ® 冊子『出雲勲業宍道家系譜』1冊。

題名無記。

洋装の固いクリーム色表紙のノートブック1冊。

生・大正8〈タロ〉年没、満8才)の手跡で宍道家自家用の罫紙に記し、紺色の表紙に峰清筆による題簽を貼り、袋綴じにして は各世代の当主と妻子を月命日毎に分けて記したもので、自家に備えた「過去帳」に当たるものである。筆跡は峰清で、 いる。53世宍道勲で終る。53世は峰清の孫勲氏の手跡。ほかに⑤と同じく冊子本形態の『宍道家霊位記』がある。こちら ®は「はじめに」に記した、10を祖本として後に42世以下を後補した系図の一つである。51世宍道峰清 (天保 6 < 1835 > 年

峰清以外の複数の別筆による追補がある。恐らく®を基にしているのではないかと思われる。 ◎は峰清の孫勲氏(明治35〜20〉年生 · 昭和58〜80〉年没)が戦国武将の宍道氏の系図(宇多天皇に始まり、

島根県宍道町、大森神社旧神職宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

八九

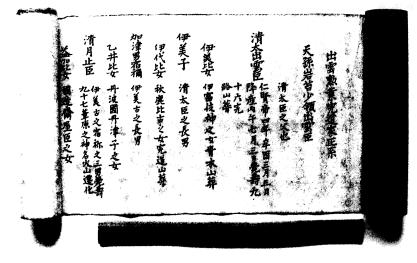
佐々木秀義、

のはない。のである。勲氏の考証も記されている。外題・内題・奥書相当のも秀、宍道秀益を経、明治2年生の省三で終る)をボールペンで写したも

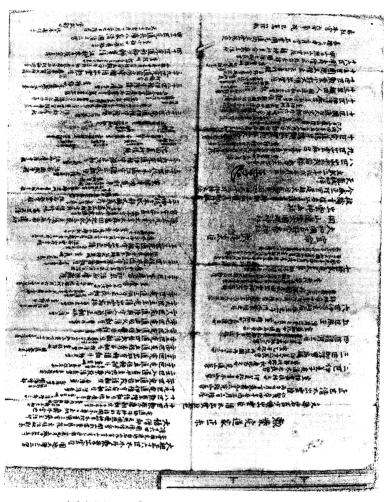
図は102と非常に近い関係にある系図である。両者は別人の手跡と のは102と非常に近い関係にある系図である。両者は別人の手跡と あ。従って、102を翻刻すれば翻刻の必要はないと考えるが、後のた あ。従って、102を翻刻すれば翻刻の必要はないと考えるが、後のた る。従って、102を翻刻すれば翻刻の必要はないと考えるが、後のた る。従って、102を翻刻すれば翻刻の必要はないと考えるが、後のた あ。従って、102を翻刻すれば翻刻の必要はないと考えるが、後のた のに書誌解題を記し、巻頭の写真1枚を掲載する。

系」。本文料紙檀紙8枚、第1紙寸法縦22.5cm・横59.1cm、有白界。軸。表紙縦22.5cm・横26.7cm。外題なし。内題「出雲勲業宍道家正軸子1軸、原装、表紙茶地龍文様緞子、見返しに金砂子、原印可

奥書なし。



写真(1) 宍道鈴子氏所蔵 巻子『出雲勲業宍道家正系』(文書②)



(文書図、史料番号似)

写真(2) 宍道鈴子氏所蔵 大鷹檀紙『勲業宍道家正系』

体に稚拙な筆跡である。文字からは作成時期の推測は不能である。 掛け、古色を着けた如く見える。色は濃淡の斑があり(写真⑵参照)、裏表は同色ではなく、裏は表よりも全体的に薄い。全 る。ために折目の文字が磨損している箇所がある。皺紋があるため、江戸中期の紙と見られる。料紙全体に橡色の染料を 大鷹檀紙 (縦51.6cm・横63.6cm)1枚に上下2段に書かれ、裏は無記。文字面を表にして横に二つ折りし、さらに七つに折

四 162 「勲業宍道家正系」翻刻

せられたという。本稿に掲載した写真は縮少率が高いから、疑点は同館のコピーを参照せられたい。 よると、宍道(池田)家の家系図を当時同館に在職しておられた藤岡大拙氏に鑑定を求めて訪れ、その際小浜氏が館に寄贈 あるから、 本系図のコピーが島根県立図書館に保管されている。共に保管されている文書に「昭和56年10月小浜安希子氏寄贈」と 同時期に寄贈されたようである。小浜安希子は小浜幸子氏の別名(「はじめに」氏名一覧参照) である。小浜氏に

さ・行を決める。考察の便宜のため、行頭に行数をゴシック体の算用数字で振るが、これは原文書の行数とは正確には一 字体を用いる。原文書の文字の大きさ・行間には不揃いな箇所が多々あるが、文脈で判断し、読み易いように活字の大き 判読しにくい文字は文書②を参照して翻字する。特殊な字、略字、俗字をそのままとすることもあるが、 概ね通行の旧

(上 段)

致しない。

勲 業 完 道 家 正 系

19	18	17	16	15	14	13 12	11	10 9	8	7	6	5	4	3	2
七世武尾上大臣 雄君臣伊古三之長男	和銅六癸丑十一月四日丹波大野谷口郭陵	室井代比女 日置大臣之女 子武尾上 大武 伊志見連	薨壽三十九 丹波國桑田出雲神社之一宮司	舒明帝十年戊 戊 二月二日降産白鳳五年丙子六月廿三日	六世伊古美雄君 成王之一子 内大紫位之臣	五世成王 清月止臣之長子	室益加比女 國造齐屋臣之女	農壽九十七葦原之神名日山迁化四世清月止臣 伊美子宿祢之三男	室乙井比女 丹波國丹津子之女	三世加津男宿禰 伊美子之長男	室井代比女秋鹿比古之女	二世伊美子 完清太之長男 完道山葬	室伊富伎神之女 伊美比女 青木山葬	正世清太出雲臣石賢帝四年至四十六一完路山葬正世清太出雲臣石賢帝四年至四三月三日降産	天孫岩苔少領出雲臣 清太出雲臣父也

島根県宍道町、大森神社旧神戦宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

百十三大和國山邊山陵葬 白鳳元年壬申正月一日降産延暦三年甲子正月六日薨壽

21

天平十一年己卯八月四日薨壽六十五山邊葬 室式 部女 丹波之日置大臣之孫女

24 23 22

27 26 大和國吉野金峯神社 25

宣

命

武 尾 上大臣

同 出雲神五社 山邊坐大國魂神社

被綸卣偁右以王道者専神明之加護冥助丹誠者有同業で加華・服制 令感正理宜建雄大臣勸賞而四海太平之可依請云依

八世出雲武宿祢 武尾上大臣之長子

32 31 30 29 28

文武二年戍戊三月三日

王

子

(花押?)…写真(2)参照

天氣状如件

室豐比女 大和彦之女

室飯多理比女出雲矛山之女

十世完道鴉早鳴瀬出雲勲業大臣 出雲武之五男

九世出雲麻呂

出雲武長男 宝亀元戊九月十九日迁化

37 36 35 34 33

九四

54 53	52 51	50 49	48 47	46 45	44 43	42	41	40	39 38
出雲國完道郷白石山阪金峯山ト号シ正暦三辰九月玉城ヲ築玉フ大祖正十六世太木臣勲業出雲臣 圓徳大僧正二男(下 段)	居紋 本宮 六合菊 院 巴蔦 笹輪長徳二丙 二月四日 出雲國完道鄉立雲院入定	開山日照山立雲院 諸神社集合齋主法印十六世圓壽僧正 天台正律 圓徳之御長男	室 室野姫紀勝吉朝臣之女十五世圓徳大僧正 天台兼修験 吉野金峯院迁化玉フ	十四世勲業小野大領出雲臣 金峯山迁化 室和泉 織田人之三男 小野茂家女	十三世織田人 国造吉朝臣之五男 勲 六位 壽七十二十二世伊津麻呂 吉朝臣長男 勲位越前國田結之陵葬	室伊吹姫 越前國田結連之女吉野迁化	十一世國造左大史吉朝臣六位 鳴瀬之一子丹波谷口山大野葬	室八重比女 出雲之葦原大野迁化	六日山邊山陵葬 大同四年己丑二月入内大臣勲位賜布壽八十一承和十二丑四月

島根県宍道町、大森神社旧神戦宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

73	72	71	70	69 68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56 55
二十八世完道陸奥守入道尊正朝奴 久清二男	二十七世完道五位久清朝臣 豐臣長男	二十六世完道五位豐臣朝臣 武清長子	二十五世完道四位武清朝臣 薨壽八十三正和三寅七月十一日立雲院葬秀安一男	二十四世完道五位秀安朝臣 頼清長男	二十三世完道出羽守頼清朝臣 頼定一男	室 家 姫 布志名保定之女	二十二世完道五位頼定剛難認吉平長男	二十一世入道吉平主典史寮茂清長男 立雲院入定	二十世完道五位茂清朝臣 安清二男 茂清四男 圓海僧都 這脈別系有	十九世完道伊豫守安清朝臣 增清長男	室家姫大清僧都之女	十八世勲業増清朝臣五位 康朝長子	室内侍阿野姫	十七世勲業康朝朝臣 太木臣長男	完道鄉佛躰神躰諸國之本尊ヲ正納 齋本宮也	大清僧都 天照國照藥師如来本地葦原三宮齋主法印准十六世 圓徳大僧正三男 開山別當寮医王院 玄信法脈別系

89	88	87 86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	7
室満女 栗原七郎兵衛女	三十四 佐々木弍部大輔義秀 義清長子 法名雲松寺殿 世 [南筆遠記] 🗷	客堂三安置齋本宮葦原三宮完道正宮 當世正清	康正元乙亥之年大森為田地大永三東之流山麻畠ニ遷ス初	薨壽七十七 室幸方 完道二郎武久之女	應永三十四丁未十二月二十三日降産文亀三癸亥八月二十五日	法名雲岩寺殿	三十三世完道伊豫守出雲正清 正長之男	法名瑞應寺殿太雅頗公大禅定門 室 眞姫 正長息女	三十二世佐佐木近江守源義清朝臣 正長養子	應永三十四年丁未十二月二日治世三十一世室慶方 和泉 法名慶徳殿」院	室 慶方 佐々木高次之女 壽九十四延徳二戌八月六日立雲院葬	二十世完道三河守正長朝臣	室左野女	二十才世主王光清出雲宿衫 尊立书琴 复治反复之女

74

二十九世主王光清出雲宿祢 尊正長男

四世池田左京

順寛之子

室

鈴野女

完道武蔵守成吉息女

神儀指官

三十九世完道安房守國清出雲勲臣 慶甫源賀大禅定門

永禄三庚申正月六日降産文録三甲午十二月朔日薨壽三十五祝部廻葬

室波姫 池田左京大夫正直之息女

室小梅女 米原廣総之女

四十一世完道兵庫介家清 國清之三男

天正十一癸未十月二十七日降産

佐々木義信之女

室 弐 部女

*

*

以上で翻刻を終え、続編でこの系図の批判を行ない、 系図の作成時期・作成者・作成の目的等を推測して行きたい。

平成12 (00) 年1月12日受理

続

九九

島根県宍道町、大森神社旧神職宍道(池田)家蔵『勲業宍道家正系』(一)

117

116

115

114

四十世完道形部少輔實清法、數譽院宗喜名原華語

113

112